

「和歌の課題」

思はじな 思ひしことは たがふぞと 思ひすても 思ふはかなさ

「漢詩の課題」

一二三 辛未元旦

辛未元旦

榎花催淑氣

榎花淑氣を催し

微暖放春晴

微暖春晴に放つ

風斂鶯將語

風斂つて鶯將に語らむとし

霞輕柳未萌

霞輕くして柳未だ萌えず

迎新先賀壽

新を迎えて先ず壽を賀し

破臘乍開正

臘を破つて乍ち正を開く

童僕飛鳶戲

童僕鳶を飛ばして戯れ

悠悠雲外鳴

悠悠雲外に鳴る

(口語訳) 梅の花には春のなごやかさが感じられ、春日和の空に暖かさがかすかに漂い、風静まって鶯もやがてさえずり出しそうなのどかさであり、かすみは淡くたなびいて柳の芽はまだ出ていない。新年を迎えて先ずはめでたさを祝い、大晦日があけて直ぐ正月の新天地が開けるのである。男の子たちは風を揚げて遊び、風はるか雲の上で風に鳴っている。まことにのどかで平和な正月である。

○辛未Ⅱかのとひつじ。明治四年(一八七二)。○榎Ⅱ梅。○淑氣Ⅱ春のしとやかでなごやかな気分。○春晴Ⅱ春の晴れた空。○斂Ⅱ収まる。○將語Ⅱ今にもさえずり出そうとしている。

○臘Ⅱ陰曆十二月。ここは大晦日のこと。○乍Ⅱすぐに。急に。○正Ⅱ年のはじめ。正月。

○鳶Ⅱ風(たこ)。○悠悠Ⅱゆっ

たりしていること。ここは遠くは

るか意。



(青)(全)(庄)(隆)

八三 温泉寓居作

温泉寓居の作

柴門斜掩占幽情

柴門斜めに掩うて幽情を占め

簷外静聴溪水聲

簷外静かに聴く溪水の声

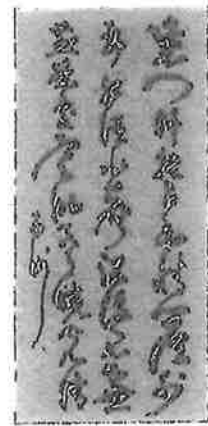
浴後閑窓煎茶處

浴後閑窓茶を煎ずる処

寒池吞月曉光清

寒池月を呑んで曉光清し

(口語訳) 温泉宿の柴の折戸が半分斜めにしまつて奥深い庭の趣をそえ、軒ばた近く静かに谷川の水の音に耳を傾けている。湯から上つてもの静かな窓のもと、茶の湯を沸かしている処で、寒々とした池の水に月影が沈んで曉の光が清々しい。(明治七年冬、山川の鰻温泉で静養中の作。西郷の宿屋は、平成十一年解体された。)



(庄)(全)(陰)

一五五 避暑

暑

避暑

暑

苛雲圍屋汗沾衣

苛雲屋を囲んで汗衣を沾し

白鳥饑來吮血肥

白鳥饑え来つて血を吮うて肥ゆ

逃暑移床臨澗水

暑を逃れ床を移して澗水に臨み

曳筇搖扇步苔磯

筇を曳き扇を揺りて苔磯に歩す

齊鳴蛙鼓田疇沸

齊鳴の蛙鼓田疇に沸き

亂點螢燈草露輝

乱点の螢灯草露に輝く

幽味最甘松樹下

幽味最も甘し松樹の下

爽風閑月度崔嵬

爽風閑月崔嵬を度る

(口語訳) きびしい夏の雲が家を取り囲んで汗は着物をぐっしよりぬらし、飢えた蚊が飛んできて血を吸って太るといふ有様である。夕方暑さを避けて床几を谷川のほとりに移して涼み、あるいは杖をつき扇子であおぎながら苔滑らかな水際を歩く。一斉に鳴く蛙の声が太鼓をうつように田の畦にわき起こり、まき散らしたような螢火が点々と草の露に照り輝いている。深い味わいの最も好ましいのは松の木陰を吹き渡るさわやかな風と、切り立った山にかかる静かな月とである。

○苛雲||きびしい夏の暑さの入道雲。○白鳥||蚊の異名。○床||床几。折りたたみ式の腰かけ。○苔磯||谷川沿いの苔が生えた道。○幽味||奥深い静かな情趣。○甘||好ましい。○崔嵬||高く険しい山。切り立った山。